



# クローン・オブ・エイダ

「人が神から与えられたのは、自分で自分を作り直す事だけなのよ」

ティルダ・スウィントン × ティモシー・リアリー × ザ・レジデント



*Clone of Ada*

監督：リン・ハーシュマン・リーソン 製作：ヘンリー・S.ローゼンタール 撮影：ヒロ・ナリク  
出演：ティルダ・スウィントン、カレン・ブラック、ティモシー・リアリー、フランチェスカ・ファリダニー、ジョン・オキーフ  
音楽：ザ・レジデント 配給：アップリンク 1997 / アメリカ・ドイツ / 85分 / 35mm / カラー / 1:1.85 www.uplink.co.jp



UPLINK

これは、ショッキングだが、現実に未来にあるかもしれないイメージだ。この映画には、私の同僚や友人の研究内容がすでに出てくるからだ。将来、確実にコンピュータは私達の間人愛の中に深く介在し、幸福と不幸を呼ぶだろう。

山田正紀 / 作家

土佐尚子 / メディア・アーティスト、マサチューセッツ工科大学

エイダが特別な存在でありえたのは、彼女が十九世紀末に生きながら二十世紀を予言して生きた、はからずも生きざるをえなかったからであろう。『クローン・オブ・エイダ』は優れて「母と娘」の映画なのである。

常磐響 / デザイナー

強い興味を引き起こすストーリーに、短いループと反復を含む繊細な映像。自己催眠の中で見ることの出来たドキュメンタリーのような錯覚を彩る、レジデンツのサウンドトラック。まるで、何も音がしていないような、冷たい手に脳髄を撫でられて安心するような…。

強い意志が、低く流れるサ・レジデンツの音楽のごとく美しき閉塞感を伴い、脳髄にやってくる。親終わって頭に浮かんだのは夢野久作の「ドグラ・マグラ」と、ムーンライダーズの「物は壊れる人は死ぬ三つ数えて目をつぶれ」でした。

青野賢一 / BEAMS RECORDS ディレクター

『クローン・オブ・エイダ』は、観る人の心を人間のクローンがもたらす可能性の世界へ導く素晴らしい映画です。芸術や科学の領域における優秀な遺伝子を、彼等の記憶や体験と共に時代を超えて生存させ、人類の未来に貢献し続けていく…、それこそがまさに、クローンエイド社の希求していることなのです。

ブリジッド・ボアセリエ博士 / クローンエイド社CEO



## クローン・オブ・エイダ

### DNAが三つの世紀の記憶を繋ぐ— 気鋭の女性監督によるアート・サイエンス・ファンタジー

本作品はデジタル・クローンをテーマに、記憶・生命の可能性に挑戦する19世紀ロンドンと現代のサンフランシスコの二人の女性の物語です。監督は、インタラクティブ・アート界で活躍するアメリカ人監督リン・ハーシュマン・リーソン。その才覚で描かれたバーチャルワールドは、ベルリン・トロント・サンダンスなどの国際映画祭で高い評価を得ました。主演に、デレク・ジャーマン監督作品や、『オランダ』『ザ・ビーチ』や『アダプテーション』などで数々の女優賞を受賞しているティルダ・スウィントン。特別出演にサイケデリック・カルチャーの伝導師、故ティモシー・リアリー（本作が最後の映画出演）、音楽に匿名カルトバンド、サ・レジデンツが参加しています。



[STORY] サンフランシスコで記憶の遺伝学的伝達を研究するエミーは、恩師シムス(ティモシー・リアリー)から受け継いだDNA記憶拡張装置を使い、時空を超えて19世紀のロンドンに生きるエイダ(ティルダ・スウィントン)との交信に成功する。エイダは、かの英国ロマン派詩人バイロン卿の娘であり、人類初のコンピュータ・プログラマーでもあった。エイダは、結婚後も自由奔放に様々な異性関係を結んでいく一方、3人の子供の子育てと自分の研究を両立することの出来ないジレンマに悩み、次第に賭け事やアヘンにのめり込んでいく。エミーは、エイダに、クローンという技術によって自らの存在を後世に受け継いでいくことを提案するが…

### 2003年7月、時空を越えたレイトショー

特別鑑賞券1500円(税込)、劇場窓口・都内プレイガイド・チケットぴあにて絶賛発売中  
当日料金(税込) 一般/1800円 大・高/1500円 中・小・シニア/1000円

### 新宿武蔵野館

JR新宿駅中央東口1分 三越裏 武蔵野ビル3F  
tel.03-3354-5670 【整理券制】  
<http://www.musashino-k.co.jp>





ローン・オブ・エイダ

*Clone of Ada*



<http://www.uplink.co.jp>

イルダ・スウィントン × ティモシー・リアリー × ザ・レジデンツ



## Recreating Yourself

土佐尚子(メディア・アーティスト、マサチューセッツ工科大学)

もし君たちの子供が、コンピュータを通して世界の才能達の遺伝子を共有していたら、その子の未来、そして、その社会の繁栄は、どうなっていくのだろうか？ これはそんな大きな疑問を投げかけるエキサイティングな映画だ。実際、著名な才能の遺伝子情報さえあれば、現実的にあり得る話だ。先端技術は私達が使う「人間性」という言葉の定義を覆す力を持っている。すでに、私達の地球上の生活は、コンピュータなしでは滞るように、人間どうしの親密なコミュニケーションにコンピュータが介在してくる。身近なところでは、すでにチャットやケータイのメールなどが入ってきている。

先端技術の基礎研究で私は、1993年に、コンピュータで赤ちゃんの人工生命を作り、感情認識機能を付け、人間の声から感情を判断するシステムを開発した。同時期に、人工生命という言葉が世界中に流行り、ロボット、人工知能、芸術、社会学生物学の中でその言葉は使われ、人工生命の国際会議が開かれ、様々な生命が登場した。その後、これらの研究は、エージェント研究や、進化システムや自立型ロボット研究に引き継がれている。

近未来は、遺伝子操作レベルで介在してくる。エイダとチャールズ・バベッジが、日本が江戸時代の時に、すべてのことは、機械によって予測できることを直観していたようにエミーは、人工生命研究に意気揚々とした新進気鋭の研究者だ。エミーは世代を超えて、エイダに自分を重ねた。この人達と、自分の現在の立場が似ているので、彼女らの気持ちは良く理解できる。この映画は、女性という産む性が物を創る際の姿勢、考え方、その行動というものは、国を超えて、時代を超えて、同じ悩みを持つということも、良く描いている。つまり、母性でものを創るということだ。これは、強みであり、弱みでもある。男性がものを創る時の取り組み方とは決定的にちがう。

とさなおこ 1980年代から、実験映画、ビデオアート、CGアニメーション、インタラクティブアートを制作。ニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館などの国内外の展覧会で発表、SIGGRAPH、アルスエレクトロニカなどで受賞。現在、マサチューセッツ工科大学建築学科高等視覚研究所リサーチフェロー

現代は、父性の時代である。しかし、将来遺伝子操作が進んで、男、女、それ以外の人間が共存するようになると、これも別のものが主導権を握るだろう。こんなことを連想させる映画だ。この先の世界観をぜひ描いてほしいものだ。

しかし、エイダの目標水準は、現代の科学技術のそれよりも高かった。これは、もっと注目されてもよいはずだ。彼女のプログラミング言語の基本概念は、文学、絵画、織物、詩、音楽を奏でる「言語」であった。そして、エイダの言葉によると「私の芸術とは、エレガントに数を紡ぐこと」なのだ。それが19世紀以降、理系独占の言語となり、科学技術と、文学、絵画などを記述する言語は、遠く離れてしまった。21世紀になり、やっと、映像や音をコンピュータで扱うマルチメディアの時代となり、また両者は近づきつつある。江戸時代に電腦機関の基礎となった解析エンジンが生まれていたにも関わらず、コンピュータの記述言語とその表現の出会いが2世紀もかかっているのだ。

物語りのクライマックスで研究者エミーは、エイダに自分を重ね、エイダのDNAパターンを自分に移植して、死の床につく直前のエイダと、接触、対話する。エイダのクローンを自分が産むことを申し出る。エミーの研究熱心さか、エイダに対する共感か。それとも、母性的本能か。監督は、このシーンで、人間のヒューマニズムの豊かさをエイダに語らせている。そう、クローンは弱いのだ。本人になり得ないのだ。クローン羊のドリーも死んでしまったではないか。

そして、エミーは女の子を産む。子供には、エイダの記憶をDNAメモリーチップにして移植したのだ。この子の成長は、そのままエミーの研究の実験材料となっている。このあつけらんとした力強いアメリカ的発想に、繊細な日本人は堪えられるであろうか？

# Comments

各界からのコメント

## 常磐響 (デザイナー)

強い興味を引き起こすストーリーに、短いループと反復を含む繊細な映像。自己催眠の中で見ることの出来たドキュメンタリーのような錯覚を彩る、レジデンツのサウンドトラック。まるで、何も音がしていないような、冷たい手に脳髄を撫でられて安心してるような…。

## 土佐尚子 (メディア・アーティスト、マサチューセッツ工科大学)

これは、ショッキングだが、現実にも未来にあるかもしれないイメージだ。この映画には、私の同僚や友人の研究内容がすでに出ているからだ。将来、確実にコンピュータは私達の人間愛の中に、深く介在し、幸福と不幸を呼ぶだろう。

## 青野賢一 (BEAMS RECORDS ディレクター)

強い意志が、低く流れるザ・レジデンツの音楽のごとく美しき閉塞感を伴い、脳髄にやってくる。観終わって頭に浮かんだのは夢野久作の『ドグラ・マグラ』と、ムーンライダーズの『物は壊れる、人は死ぬ三つ数えて、目をつぶれ』でした。

## ブリジッド・ボアセリエ博士 (クローンエイド社CEO)

『クローン・オブ・エイダ』は、観る人の心を人間のクローンがもたらす可能性の世界へ導く素晴らしい映画です。芸術や科学の領域における優秀な遺伝子を彼等の記憶や体験と共に、時代を超えて生存させ、人類の未来に貢献し続けていく…、それこそがまさに、クローンエイド社の希求していることなのです。

## 山田正紀 (作家)

エイダが特別な存在でありえたのは、彼女が十九世紀末に生きながら二十世紀を予言して生きた、はからずも生きざるをえなかったからであろう。『クローン・オブ・エイダ』は優れて「母と娘」の映画なのである。

クローン・オブ・エイダ

発行日○2003年8月2日 編集○浅井隆 吉原美幸 清原明子

アップリンク・スタッフ○示村敦子 大森明美 倉持雅晴 鎌田英嗣 新井直子 直井卓俊 上田勝之 加藤有花 作美はるか

HP制作○濱田智 金山知世 デザイン○伊丹友広 大野美奈 (IT IS DESIGN) 製本・印刷○桐原コム

発行者○浅井隆 発行○アップリンク

150-0041 渋谷区神南1-5-15 メイジハイツ1階F号 TEL.03-5489-0755 FAX.03-5489-0754 <http://www.uplink.co.jp>